

実しほゝもるれ民は

震や津波による甚大な被害から自らも復興途上にある同市にとって、仮の町構想は五里霧中にある。

同市は仮の町の受け入れに当たり、都市計画上の理由などで「分散型」の整備を求めている。市は人口減少期を迎える、コンパクトシティーの考え方を取つており、住宅地としての土地利用は市街化区域を最優先とする。ニュータウンとも呼

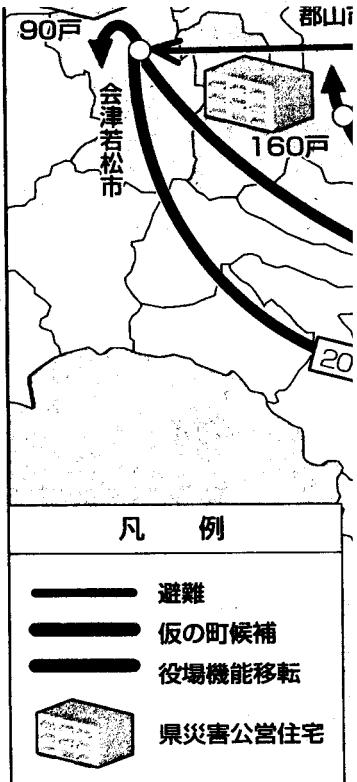
閉鎖空間となる恐れも分散型とする理由。仮設住宅よりも借り上げ住宅を利用している避難者が多く、実質的に分散型居住の実態もあり、あらためて住民を一力所に集めることは現実的でないとの見方もある。

避難町民の仮の町への居住意向も課題として指摘される。市幹部は「住民意向調査では（仮の町）居住希望が多くない。大規模造

「大規模開発あり得ない」

ばれる「集中型」の整備では、同区域外の郊外に土地を求める必要があり、上下水道など新たな社会基盤の整備や維持管理、住民帰還後の跡地利用も課題となる。

成は考えられない」と話す。「『仮』の町といつ」とはいつか帰還するといつこと。大規模開発はあり得ない」というのが市の立場だ。



宙に浮いた協議

制度化進まず、市長不満

約2万4千人の避難者を受け入れている仮の町候補地、いわき市で昨年12月、公共施設に震災と原発事故の被災者を中傷する落書きが見つかった。市幹部は「一部だが、市民と避難者間にあつれきが生じている」と明かす。目に見えない問題は、仮の町構想の行方と複雑に絡み合う。市民と避難者の間のトラブルは落書きのような間接的なものから、直接的な問題にも及ぶ。市幹部によると、避難者と市民が賠償金を発端にけんかが起きて暴行事件になりかけた事例などが確認されている。同市の主婦(38)は「しつかり働いている人もいれば、働くに賠償金で生活している人もいると聞く。

市民と避難者 不和に危機感

故郷に住めないことはかわいそうだが、節度ある振る舞いも必
要」と話した。

市民と避難者の関係は負の部
分だけではない。こうしたトラ
ブルの一方、避難先の町内会に
加入し、町内会活動に積極的に
参加する人たちも多い。市内で
事業を再開し「いわき」を新天地
として前を向く人たちもいる。

一部の市民が体験した負の面
を、避難者全体に当てはめるの
は誤りだろう。別の主婦(31)は
「良くないわざを聞くと先入
観を持つてしまう」と吐露。「悪
い話だけがない」と市民とし
てもきちんと理解しないといけ
ない」と、避難者に不満を持つ
市民の意識に警鐘を鳴らした。

県は、長期避難を余儀なくされる原発被災者を対象に郡山、会津若松、いわき3市に災害公営住宅を整備する。いわき市小名浜下神白の予定地

と
てかくたん田の裏山に
下おこさんと一例の田舎石
には市民の理解が必要。整備の本格化と併せて市民に説明していく」と話した。